

定点観測

成田重行流

「地域開発の戦略学」

1

# 内藤とうがらし復活物語

全国で地場産品を活用した地域開発に携わっている人がいる。オムロン元常務で、現在は地域プロデューサーとして活躍する成田重行さんだ。企業で培った経営者としての才覚を、地域開発にもいかんなく発揮した市町村数は30に及ぶ。その豊富な実践事例から地域開発における戦略を学びたい。

文・撮影／窪田新之助

百貨店の店舗別売上高でトップを誇る伊勢丹新宿本店（東京）。その地下1階にある食品売り場で10月7日からの1週間、ちょっとした異変が起きた。NPO法人おいしい水大使館が、メインステージである「フードコレクション」のコーナーに店を構えたのだ。一般の食品会社ではなくNPO法人がここを借り切るのは異例だという。

非営利団体をそのフロアの顔にするというのは、伊勢丹にしてもNPO法人にしても、ある種の賭けともいえる大きな試みだろう。そこまでの覚悟を持って両者が仕掛けたのは「新宿内藤とうがらしフェア」。後ほど述べるように、新宿と深い縁があるこのトウガラシの存在を広めようと、その加工品をさまざまに提案したのだ。

他店もこの動きに同調した。事前にNPO法人が伊勢丹地下の各店を集めてフェアへの参加を呼びかけたところ、40社が協賛することになった。協賛各社は、内藤とうがらしを炊飯器と一緒に炊きこんだおにぎり、ペーストにした七味、ドレッシング、おかきなどを店頭に並べた。

百貨店で、一つだけの特産に着目して、各社が足並みをそろえるのは珍しい。買う人は、値札のそばに内藤とうがらしのマークがあるので、その存在が一目でわかる。そのマークをたどることで、各店が内藤とうがらしをどう使いこなしたかを楽しまれたはずだ。

## 江戸の新宿に広がった

### 赤いじゅうたん

内藤とうがらしという名前については、本誌

の前号特集をご覧になった方はご存じのことだろう。由来は信濃国の高遠藩主である内藤家にある。その名を冠する内藤とうがらしは、6代当主（※7代との説もあり）の内藤清枝が信濃国から持ってきた八房系である。いまの新宿御苑の地に下屋敷を構え、そこで作りはじめた系統だ。

その後、江戸では新宿中の農家がこのトウガラシを作るようになった。それは次のような理由からである。江戸は人口の大半が男性。侍や職人などの単身者が多く、彼らは自炊するよりも屋台で飯を食うことを日常としていた。とりわけ手軽に食えるソバ屋がはやった。そしてソバの薬味として提供されたのが七味トウガラシだったのだ。

最近自費出版された『情熱の！新宿内藤とうがらし』新宿名物誕生生物

## ■プロフィール

成田重行（なりた しげゆき）

1942年生まれ。70年立石電機（現オムロン）入社。91年同社常務取締役、2001年ナルコーポレーション代表。地域プロデューサーとして、全国30カ所の市町村で地域の活性化を支援してきた。05～09年スローフードジャパン副会長、2000年中国国際茶文化研究会名誉理事。多摩大学、立教大学、東北福祉大学などで講師・教授を務めた経歴もある。



## 内藤とうがらし復活物語

語』によれば、このトウガラシは空に向かって実を着けることから、新宿から大久保までの一帯は、秋になると赤いじゅうたんのようだったという。太陽の光をさえぎるようにしてビル群が立ち並ぶ、現在の新宿からは想像できない光景である。

そうした都市化の波こそが、まさしく新宿から内藤とうがらしを絶滅させる要因となった。つまり、新宿が宿場町として繁栄するに従って、甲州街道や青梅街道の並びには間屋や流通業などが出現して宅地化が進み、次第に農地は消えていった。拍車をかけるように、八房系よりも辛みがずっと強い鷹の爪系が登場し

た。その刺激にひかれた農家は八房系に代わって鷹の爪系を作るようになったのだ。いつしか八房系は忘れられた存在となった。

### 内藤とうがらしプロジェクト

その八房系を現代にのみがえらせる「内藤とうがらしプロジェクト」が動いている。それを仕掛けた人物こそ、これから始める連載の主役である成田さん。プロジェクトの一環で、成田さんが所属するNPO法人おいしい水大使館は10月4日から、新宿を代表する名店で冒頭のフェアを順次展開していった。その企画企



伊勢丹新宿本店でのフェアで、NPO法人おいしい水大使館は内藤とうがらしの鉢植えも販売した



NPO法人おいしい水大使館は伊勢丹新宿本店のメインステージを借り切った

業として名を連ねたのは、「新宿中村屋」「タカノフルーツパーラー」「天ぶら つな八」「花園万頭」などそうそうたる顔ぶれだ。

10日間近くに及ぶフェアの期間中、筆者は成田さんに同行して各会場を訪れた。伊勢丹以外の会場は意外なところだった。

たとえば東京都新宿住宅展示場。不動産各社が住宅を展示している一画で、各住宅の前に内藤とうがらしのプランターとそのレシピカードを置いたほか、葉トウガラシの佃煮を調理する体験会を用意。合わせて、このプロジェクトに賛同する学習院大学の女子学生たちが内藤とうがら

しの歴史を紹介した。東急ハンズでは内藤とうがらしで魔除けのお守りを手作りするコーナーを、紀伊國屋書店新宿本店ではトウガラシ関連の書籍などを販売するコーナーを設置したり、フェアの期間中はまさしく新宿中が赤く染まっているような印象を受けた。

フェアに参加した食品業者が使う内藤とうがらしを栽培したのは、都内の農家に加え、新宿区の区役所や郵便局、各家庭のベランダなどで、その職員や社員、住民ら。いずれも成田さんのプロジェクトに呼応した人たちだ。新宿中をちよっと気にして歩けば、あちこちでプランターに植えてあるトウガラシの姿を目にすることができるといえる。

### 成田流地方創生術 最初のステップ

#### 地域を見つめなおす三つの視点

それにしても、成田さんはどうやって内藤とうがらしを発掘し、ここまでの事業に成長させたのか。ここからは成田重行流の地方創生術について紹介したい。

成田さんはかつて新宿に事務所を構えていたことがある。全国での地域開発に奔走するなか、あるとき、足元の新宿では何もしていないことに気づいた。2004年のことであ

る。そこで新宿ならではのものを探  
すことにした。

成田さんは、地域開発をするにあ  
たり、最初にやるのが三つある。  
一つ目は根っこ探し。つまりその地  
域の歴史と文化を探る。二つ目はそ  
の地域が一番高い場所に登り、地形  
学的にその土地の様子を眺めるこ  
と。その地域の生活や習慣が把握で  
きる。三番目はその地域の主婦の手  
料理を食べること。特産物の存在を  
知ることができる。この三つを実践  
することで、「地域開発のヒントが  
わいてきます」という。

内藤とうがらしを発掘した手法も  
同じ。成田さんは新宿の地域開発を  
思いついたとき、まずはこの地の歴  
史文献を渉猟しはじめた。文化・文  
政期（1804～1829年）に編  
集された武蔵国の地誌『新編武蔵風  
土記』、江戸の自然と生活の記録『武  
江産物志』、江戸時代後期の三都の  
風俗や事物などを著した『守貞漫稿』  
などの文献を当たったほか、伝説や  
口碑の類も収集したのだ。その末に  
見つけたのが、江戸の新宿ではトウ  
ガラシが名産だったという事実であ  
る。

### 縦の糸と横の糸をつむぐ

ただし、以上の活動だけなら歴史  
家のそれにとどまる。成田さんは自  
分の仕事について「現実をつくるこ

と」と話す。それはつまり縦の糸と  
横の糸をつむぐことだと、筆者は受  
け止めている。縦の糸とは歴史、横  
の糸とは現代に生きる人たちであ  
る。彼らに内藤とうがらしの意味を  
提示できなければ、それこそ意味が  
ない。

2010年1月、6年かけて調査  
した内藤とうがらしの歴史をまと  
め、新宿御苑で展示会を開いた。こ  
のとき、来場者たちからの大きな反  
響が事態を動かした。会場でアンケ  
ートを取ったところ、「内藤とうが  
らしを復活してほしい」という多く  
の声が寄せられたのだ。

その声を受けて成田さんが向かっ  
た先は、茨城県つくば市にある国立  
研究開発法人・農業生物資源研究所  
の遺伝資源センター。21万5000  
点の植物の遺伝資源を保存している  
同センターに頼み込み、八房系の種  
子を譲ってもらったことになった。

### 共感から ムーブメントへ

#### 搦め手から攻めよ

では、それを誰に栽培してもらう  
ことにしたのか。ここは重要な点に  
なる。成田さんが栽培の話を持ちか  
けたのは、都内の農家に加えて、新  
宿区で働いたり住んでいたりする人  
たち。とりわけ学校の児童や生徒た

ちに作ってもらおうと思った。

その結果、たとえばある小学校は  
校庭の一面に菜園を用意し、児童が  
内藤とうがらしを苗から育ててい  
る。収穫したら、料理や加工づく  
りをしている。また牛込第一中学校  
と韓国学校中等部では両校の生徒た  
ちが共同で、内藤とうがらしと韓国  
のトウガラシでキムチづくりを通じ  
た交流している。

なぜ子どもたちだったのか。成田  
さんはこう語る。

「内藤とうがらしを作る子どもたち  
は、そのことを親に話す。それは内  
藤とうがらしの存在を知ってもらう  
という意味で、親に対する最高のア  
ピールになる。こういう下地をつく  
っておけば、新宿各店で内藤とうが  
らしのフェアがあったときに、親も  
子どもも、すぐにぴんとくる。もち  
ろん各店にとっても、地域住民が栽



内藤とうがらしを使った加工品

培に取り組んでいるんだから、自分  
たちも何かやるうという動機づけに  
なる」

いわば「搦め手から攻めよ」。親  
という本丸を落とすなら子どもとい  
う搦め手から攻める、名店という本  
丸を落とすなら地区の住民という搦  
め手から攻める。新宿区民の間で内  
藤とうがらしの認知度や関心が高ま  
れば、彼らを大事な顧客としている  
企業は無視できなくなると考えたの  
だ。

### 企業を落とす大義と必然性

新宿の名店が一斉に企画提案に乗  
ってきたのには、もう一つ大きな理  
由がある。それは「大義」と「必然  
性」だ。

「新宿駅を出てみたら、全国どこに  
でもあるチェーン店ばかり。しかも、  
どの店も同じようなことばかりやっ  
ている。食品売り場に行けば、北海  
道や九州の物産展とかで、新宿らし  
さが無い。そこに僕は、内藤とうが  
らしを通じて新宿の文化をつくるこ  
という大義を持ち込んだ。新宿ならで  
はの個性が必要なのではないかと  
いう提案をしたんだ」

### 話をつけるべきは企業のトップ

ただ、そうした思いを企業の企画  
担当者につけても、すんなりは通  
らなかつただろう。決裁権を持つ役  
員に届くまでに、消えてしまうのが

## 内藤とうがらし復活物語



フェアの期間中、NPO法人おいしい水大使館は内藤とうがらしの発祥地である新宿御苑でも活動した

オチである。だから肝心なのは「いきなりトップに話をつける」ことだ。

たとえば伊勢丹の新宿本店については、同社常務兼本店長である鷹野正明さんに直談判した。

先に紹介した『情熱の！新宿内藤とうがらし〜新宿名物誕生物語〜』で、鷹野さんは成田さんから企画の提案を受けたときの感想を次のように語っている。

「瞬間的にビビっときました。新宿はいろいろなモノが集まる場所ですが、『これぞ新宿』と語れるものはありません。そこで、内藤とうがらしのように、土地の先人たちが培っ

てきたモノを、次に繋ぎたいと思っただのです」（原文ママ）

おそらく内藤とうがらしの命運は好転したといっているだろう。鷹野本店長がフェア開始日の式典において、「来年から継続して実施する」と公言したからだ。内藤とうがらしの行方において、売上高でトップを誇る百貨店側が発したこの言葉の意味は重い。

### 小さなものの無限の可能性

#### 夜明け前までの準備が最重要

成田さんは地域開発の事始めにお

いて、「テープカット直前の夜明け前」が最も大事だという。内藤とうがらしフェアを例にすれば、たとえばそれは伊勢丹でフェアを開催する瞬間である。この時点ですべて勝負は決している。どれだけ内藤とうがらしを使った商品が買われ、どれだけ広がっていくのかの命運は決まっている。夜明けを迎えるまでの下準備については、すでに述べたとおりである。

#### 地域開発における三つの原則

最後に、成田さんが地域開発をする際の三つの原則に触れておきたい。その原則とは「必然性」「納得性」「唯一性」である。

内藤とうがらしを例にすれば、必然性は、新宿が駅周辺にチェーン店ばかりが増えて個性を失いつつあるということ。納得性は、全国の都市が抱えるそうした潮流のなかで、新宿独自の文化を発信すること。唯一性は言うまでもなく、内藤とうがらしが江戸の新宿で広く作られたという事実だ。この三つの原則がそろって初めて地域開発はスムーズに動きはじめるという。

#### 地域の未来はプロセス主義

最後の唯一性について、もう少しだけ述べたい。成田さんは、地域開発に携わった全国30カ所で、まさにそこにしかないものを発掘してき

た。それはいずれも、大きいものではなく、小さいものである。全国どこでも作れるものではないし、大手の企業が絡んで大きく儲けるものでもない。そうした小さなものに着目する理由についてはこう語る。

「世の中において王道や花道を歩けるのは100万人に1人だけ。ただし、王道は歩けなくても、おもしろいヒトやモノはこの世にたくさんある。そういうのを捨てるのではなく、どう活かすかが、これからの地域に問われているのではないか」

しかも耳を傾けたいのは、「小さいものを活かすのは大手企業にはできない」ということだ。なぜなら大手企業が求めるのは「成果主義」だからだ。成果主義で問われるのは、どれだけ儲かったか、どれだけの人数を動員できたか、などである。

成田さんが地域開発で大事にすることはその対極にある。つまり「プロセス主義」だ。参加する人たちが、小さいものを作り上げる過程をいかに楽しめるのか、おもしろがれるかが問われているのだ。

そういう意味で今回の内藤とうがらしフェアは意義のある取り組みだった。プロセス主義が放つおもしろさに、多くの企業が乗ってきたから。小さいことの可能性は無限に広がっている。